

貸家物語 (7)

DV家庭くモモンガ飛ぶく

小野 友貴枝

(1)

A棟に入ってくることになった武井郁夫が、顔見せのつもりか、「大家さんに挨拶したい」と言っている。聞けば、「丁寧な方だな」と未知子はつぶやいた。最近、不動産屋の紹介で書類が回ってくるタイプが、ほとんどであるので、少し緊張する。

武井夫婦は、骨格のしっかりした背筋の伸びた郁夫と、控えめな、うつむき加減の妻、奈美夫婦が揃って、挨拶に見えた。夫婦の印象としては、落ち着きを感じられるので、入居は間違いないと思えた。

「いままで、アパートの二階に住んでいました。ここでは、妻がいろいろと『泣き声でするとか』『物を投げた音がする』と中傷されるので、一軒家に移りたいと思います」

住んでいたアパートで、トラブルがあったから、新しい一軒家に住み替えたいという転居説明を聞く。理由などどんな内容でも気にしない、それよりも知的な



夫婦が入ってくるだけでどうぞお願いしますという感じだ。新築した家は、一般の家の造りと同じで、賃貸住宅といった安普請はしていない。建て方も頑丈に出来ている。室内の物音は外に漏れないと自慢できる。「どうぞ、先月完成したばかりです、ちよつと道路際

ですが、大丈夫ですか」

「日中、外を人が通る家の方が安全です。その代り夜は、静かでしょう。そんな家に引越したかった、誂え向きの家です」

武井郁夫の自己紹介によると、市内で開業している歯医院の次男、本人は、歯科医が嫌で薬剤師、県立病院で働いていると名乗る。歯科医院は兄弟でやる程、常連患者はいない。三代続いているという大きな建物で、市内では名が知れている。彼は技術職というよりも事務職のような如才なさで説明する。

「今まで住んでいたアパートの二階は、前が道路になっているので目立たないと思っていたがかえって遮るものがないので、室内の音が筒抜けになってしまうのです」

「アパートは、隣同士の音が漏れてしまうのでしょうか、何世帯いたのですか」

「四世帯です。静かでいいと思ったのですが、その静かさがかえって仇になりました」

アパートの騒音の話武井夫婦はするつもりで来たのではないのだろうが、話は続く。

「なんか、トラブルでも」

「いや大したことではないのですが、妻が気にするも

んですから。アパートには、うちは無理かと。それで仲田不動産屋さんに相談しましたらこちらを勧められましたので。早めに行った方がいいと言われてきました」

「新築したばかりです、どうぞ」玄関先の話だが、未知子は、一番めの共稼ぎ夫婦を歓迎して迎えた。

「動物を飼ってもいいとか、どんなものでも、ということはないでしょうが、」

「例えば、」

妻の奈美は、ちよつと引いた感じで、それでもしつかりした口調で答えた。

「私は、モモンガを飼っています。いかがでしょうか」夫の後ろに隠れるようにしていた、妻が一步前に出てきて、モモンガと言った。未知子は突然なので、一瞬びつくりした。もちろん、この住宅は小動物が飼えるようになっていた。しかし未知子としては、猫だけは、原則的に許可しない。以前、野良猫を飼った人に出会って、その野生さにびつくりした、その後、猫のくくりは厳重にしている。

「例えば血統種付のペルシア猫とか、ニホン猫というもので飼っているものは良しとしているのです」

「ニホンモモンガです、おとなしく害はありません」

「モモンガ、初めてですが、時々、箱根の旅館で見ますよね、玄関先に、門番のように。大体ゲージに入っていますけど」

「そ、そそ、そんな感じですよ」

「なぜ、モモンガなのでしょう」

未知子は野暮なことを聞いたと思つた、好きで飼っている人に、なぜはおかしい。

「今は、人なつっこくて可愛いです。繰り返す言葉は理解しますので、部屋の中になじみます。私たち夫婦に、まだ子供がいませんので、モモンガの世話で慰められます」

「言葉が伝わるのですか？ 声は、発するのですか」

「慣れてくると、ジ、ジと鳴きます」

話を聞いているだけでは、問題がなさそうだ。

「どうぞ、部屋を見て行ってください。先月完成したものですから、少し塗料の臭いがします」

夫が前に進んでお辞儀をした。妻は、他人事のように、傍で見ている。

「開けてあります。どうぞ」未知子は質問がない限り、先に部屋の説明をしない。

家の間取りは、玄関を上がってから、板の間に引き

続いて、ドアを開けるとダイニングになる。広く取つてあるのでテーブルを置く使いやすいだろう。その南側が洋間、大きな和風テーブルが置ける。そこから入った左側に、和室と洋間がある。開けておけば、六畳間が並ぶが締めれば鍵もかかる。夫婦別室に使うことができる。特に小動物と一緒にいたい時にはこの方が使いやすい。風呂場やトイレは西の角にある。だからこの家は南北に少し長い。

武井夫婦は、クローゼットから戸の開き締めまで丁寧に見ている。かなり間取りに拘って居るようだ。ここによると、寝室を別にしたのかもしれない。五代過ぎの人の好みで寝室を一緒にしなくても済むようにしてあるので、その辺は、説明しなくても一目見てわかるだろう。

家の中を丁寧に見て、納得したのか、「間仕切りにいい材料を使っていますね」と、郁夫から問いかけるような言葉があった。

「仕切りだけではありません、床も天井も、そして壁もすぐにははげないようにしています。役付きの人につかってもらおうと、できています」と説明を簡単にした。

「そうでしょうね、いい造りですね。場所もいいし、

そして物音が外に漏れないようにしてあるのもいいですね」

「ですから、十万以上の家賃を思っていました、不動産屋さんに仕切られてしまつて、十万丁度にしてあります」

「建坪はどのぐらいですか」

「十七坪あります、敷地は二十三坪でしょうか」、未知子の横に立った武井が気に入っているなという感じが伝わってきた。

「そこそこの一軒家のようですね」

「役付きの人の単身赴任、夫婦だけとか、ちよつとした、ハイレベルの人、と思つて造つてあります。平屋ですから土の匂いがします」

武井は顔を上げて、感心したように聞く、きつといるんなどころを見てきているのかもしれない、やつと巡り合つたという感じだ。

「平屋の方が使いやすいですよ、子どもがいれば別ですが」妻の奈美が、誇張もなく言つた。

「この土地は、耐震工事がされていますから、安心して生活できますよ」

未知子が、少し、オーバーに宣伝すると、彼らはさらに興味を持ったようだ。

「十分な説明を伺いました、ありがとうございます」

と、丁寧な言つて帰つていった。未知子は、見送りながら、会話を交わす時に味わたつた、妻の丁寧な物言いにちよつと違和感を覚え、夫婦の距離がある、というかすかな不安が残つた。

次の日、不動産屋から入居したい、というはつきりした意思表示があり、「進めます、よろしいですか」という連絡が入つた。

武井夫婦は、五月一日から入居してきた。保証人は、歯科医の兄と、すこし遠いが、相模原に住む、美奈の兄の印が押されていた。車は一台で、空いたところに物干し台を置きたいというのが希望であつた。追加項目の少ない夫婦で、賃貸契約が原本どおり進んだ。

新築一か月目で、彼らは、第一号入居者となつた。

(2)

新しい貸家に引越してきてから、一週間後、五月七日から出勤する。武井夫婦は、一日も休まずにゴールデンウィーク、暦の通り仕事をしている。

一日に荷物を全部運んで、家具の置き場所は、前もつて決めた通り、運送屋が置いて行つてくれたので、

これほど休む必要はなかったのだが、ちょうど五月ゴールデンウィークに入っていたから、休みは四日間で済んだ。家具と言っても、洋服箆筒と本棚が二竿で、後は茶箆筒、テーブル。美奈は嫁入り道具に持ってきた和ダンス、洋ダンス、そして寝具入れの二竿は、兄の齒科医院に置いたままで、必要な時だけ、取りに行くことにしてある。

何分にも、自分たちの家を持つという発想は、郁夫の中にはない。実家には別棟の物置があるのだから、決して新しい家を建てることは許されていない。賃貸で充分だ。もしどうしてももの時には大きな楠のある実家に戻りなさいと言われていた。

美奈は、夫を送り出した後、小さな花壇を作ろうと、大家の未知子を訪ねた。

丁度未知子は、庭先で、雑草を抜いていた。

「少し、土を分けてください。花壇を作ろうかなと思ひまして」

「あ、どうも、先日は美味しい、柏餅をいただきました
て」

「この季節には、柏餅ですね」奈美は、家主の未知子の言葉の明るさに故なく気分が救われた。

「どこで買われたのですか。美味しかったです。家はみんな甘党なんですよ」

「駅前の名店で買いました。そうですか、うちもそうです。テーブルに置いておくと、いつのまにかなくなります、コーヒーと一緒に食べますの。花壇を作ろうと思っっています、バケツ一杯の土をください」

「花壇をね、いいですね。今、チューリップはピンク、赤、紫ばかりで趣向がないので、これから、ピンク以外の白や黄色を咲かせようとしているのですが、次年には育たない。なぜなのでしょう」

「私も真っ白い花がすきです、でも私には球根は無理です、育てたことがあります」

奈美は本音を言った。アパート暮らしでは土いじりができない。やっと草花を育てられる環境を手に入れた。

「そんなことはありませんよ、二、三個球根、買ってきましょうか、私の行きつけのお店で」

「そうですか、これも『縁』ですから買ってくだささい、ピンク系の花で結構です」

「ご主人は、大丈夫ですか。アメリカアマリリス、ダリア、ユリなど球根の苗は高い、五百円はしますけれど」
「高いのですね、じゃ、夫と相談してから決めます」

「そうしてください。彼が別の花を好むようでしたら、多年草は止めましょう、もつと普通の草花の庭園になさいよ、手入れが楽です」

「いろんなことに手を出すと怒られそう、私が、モモンガを飼っているのです、これもはじめは夫が嫌うので、どうしようかと悩みました」

「モモンガ、そうでしたよね、それで、どうなさったのですか」未知子は話をうまく引き出してくれる、話の好きな人で親しみやすい。

「今は、別の部屋で飼うならと許されています。日中は鍵をかけています、もともと夜行性ですから、問題ないのです」

「良かったですね、部屋にカギがかけられるようにしたのは、私の発想です。これからそのような入居者があるのではないかと思ひまして。部屋の音も外に漏れません」

「こんな貸家見たことありません、入居者の生活をよく考えて、設計されていると思ひました、経費が掛かりましたでしょう」

「確かに、見かけのいい家は、需要はありますが、でも新築した時だけで、すぐに安普請が分かってしまいまず、床なんか十年でぼこぼこするんですってね、そ

れから動物を飼う人用にもできていません」

「ありがとうございます。おかげさまで私は、いい家と出会うチャンスに恵まれました。夫の兄は、土地持ちで大きな医院を管理していますので、決して自分の家を作っちゃいけないのですって。兄弟二人ですから、弟の土地も十分あると言っています」

「日本は、マンションだつて部屋に鍵掛かりませんよ、それが家庭というものだ、そういう歴史があります」
「鍵掛かる部屋があるということは、生活には便利です。思春期の子供がいたなら、当然の設備でしょうね」
「子どものいない人には分からないかもしれませぬね」
ア、バスが来ます、大変だ」

奈美は、カバンを肩にかけて、早足にバスストップの方に向かった。駆ける姿は若い。

未知子は、後ろ姿に「また来てください」と大声を上げた。

(3)

新築したばかりの住居に引っ越してきて、二か月経つ。やっと広いダイニングでの生活が板についた。夫が戻ってくるまで、または眠るまでここにいて、夫の姿を目で追っている。本心は一時も早く自分の部屋へ

入りたいのだが、そうもいかない。もういいよという、切りのいいところを見計らって、奈美は、そそくさと自分の部屋に入る。そこにはいつ戻ってくるのかと待ちわびている、オスのモモンガ、「貫太」がいる。日中たっぷり眠ったので、これからが僕の番というように身構えている。身構えるといっても、別に動き回るわけでもなく、奈美の後をついて歩いていくだけ。「貫太」と呼ぶと、素早く寄ってきて、奈美の足元で、彼女を見上げる。丸く大きな黒目がたまらない、光を全部吸い取ったかのように一気に光る。美奈が寂しげな顔を見ると、その表情を見抜くのか、光が半減する。「オイデ」と呼ぶと、胸元に飛び込んでくる。貫太の一番好きなんだっこの時間になるのだ。

奈美は、ベッドに座ってテレビを観る。そこで彼女は毎日日記をつける、その日によつては好きな本を読む。大体エッセイがすきだ、ことによつては図書館から借りてきた女性作家の短編も読む。その時間が一時間あれば、一日の終わりを、誰にも邪魔されずに楽しめる。最近では、結婚生活を書く川上広美の作品がいい、心が慰められる。

さつき、食卓で郁夫から「また、ダメだったのか」怒られた、イントネーションを思い出していた。何を

怒っているのかと気にしないように、返事しないでいると、夫は無視されたと思うのか、「子供だよ」と大きい声で再確認する。奈美の生理周期を知っていて、三日前から生理が始まったことを言っている。トイレの臭いで、夫は気づいてしまう。

「私のせいではないよ」とせいせいと言い返したいが、後が怖いので黙って耐える。「せつかくいい家を借りたというのに」と続ける。「へい、セックスするために借りたの」と嘲笑してやりたいが、これもこらえる。そして叱られた夜はとなりの部屋に呼ばれなくても済むので、この暴言をやり過ぎた方が得策だと耐えている。ここはアパートと違って、寝室が別部屋にあるので、何をどう怒鳴られても関係ない。アパートの時は、夫を拒否するときは玄関の近くの板の間で寝た。いつでも逃げられるように、ドアの近くに陣取る。この対策が夫には効いたらしく、玄関の場所では怒鳴らなかった。

寝室では、昼間ぐっすり寝ていたモモンガが、テーブルの上で、美奈を待っていた。

「寛太君、何して遊んでいたの」と訊いた。寛太という呼びかけにモモンガは、体をくねくね寄せてくる。

寛太はここに引越してきてから。この部屋を自由に飛ぶ、部屋の角と角にハンモックを付け、そこで揺れながら昼寝するのが好きだ。その姿は、全くこの部屋の主になった気分、天井の隅を駆け回ることも覚えた。

美奈の膝で、寛太は気持ちよさそうに体をゆすっている。彼は八歳、もう思春期が来ている、ガールフレンドが欲しいだろうと、彼のお腹を触っていた。この手触りは、美奈にだけ、許す寝技だ。

この時、夫がドアを叩いた。奈美はアツと思つた。さっきの愚痴は、今晚の予行練習であつたのかもしれない。夫の攻撃性は、えてして奈美を攻めるデモストレーションだ。彼は、一番許せる妻への甘え、本音をぶつけていたのだ、奈美がそのことで、どんなに嫌な思いをしているかわからないというのに、夫は妻にうつぶんを晴らし、今晚のラブコールの準備をしていたのだ。もしこの行為を、奈美が邪険に外せば、夫は、その後、DVをするだろう。夫の誘いを断らないと決めて、この家を借りてもらつたのだから、ドアのノックに応ずるほかない。

「ハイ、行きます」

と、言つた。寛太はすでに夫が入ってくる前に飛び

上がつて、ハンモックの棚に乗つた。夫の足音でも彼は嫌う。夫が室内で飼うモモンガを好んでいなかったことを知っているかのように、郁夫の動きに敏感で、すつと姿を隠す。

「少し、我慢をして居なさい、じきに戻つて来るから」
奈美は、縞模様のパジャマの上にカーデイガンを羽織つて、自分の居心地のいい部屋から、鳥肌の立つような夫の部屋に向かつた。

思つたとおり、郁夫は、奈美の好きな赤ワインのボトルを立てて、迎えた。決してサーブスをしているのではない、彼自身も、もう酒気がなければ妻が抱けなくなっている。彼は怒気と酒気で、ベッドインしたいのだ。妻も素面で、夫と対面するほど馬鹿じゃないことを知っている。普段、やさしい言葉を掛けるほどのゆとりのなさ、ある時には手を挙げる、自分の内部にある暴動を知っている。素面では妻を抱けない、暴言という背信行為をして、エクスタシーを煽る。親族の人によると、夫の父親も気難しく、妻に手を挙げる人であつたと聞いている。昔の家の中はそのぐらいの権威ある行為は普通であつたから、見過ごされてきたが、今は拳骨一つでも、妻に向かえば、DVとして訴えることができる、まして彼の家系は歯科医院である。家

族が家庭内暴力をすれば、新聞に載る、それほど現実
は、暴力沙汰はデリケートな問題である。しかし、夫
は、そのことを十分知っていないながら、自分の意見が通
らない時、傍に誰もいない時であれば奈美に対して手
を挙げる。妻が逃げればなお、室内箒を持ってでも追
いかける。自制が効かないらしい。その時という彼の言
葉を拾うと、「警察でも何でも、訴えろ、この野郎、い
い気になりやがって」と言つて足で蹴つてくる、足だ
けでなく、拳骨で背中、足を殴つてくる。さらに奈美
のすきを狙つて首まで絞める。この時の夫の形相は、
ひどい、暴力団のチンピラだ。目の前にいる人がいま
で愛し合っていた、裸の妻であったとしても、頭に血
が上つてしまうと見境がなくなる。

こんな暴力にあつていながら、なぜ奈美が夫婦をし
ているのか、それも子どもがいけないのに、と言われる。
奈美も本当にそう思っている。いつでも出ていける、
職業、保健所の歯科衛生士という部門、副技官という
肩書も持っているのに、なぜ別れないのかと自分でも
思う。

なぜなんだろう、子どもがいれば別れられないとい
う意味は分かる。奈美は、仕事が終われば、毎日に

帰ってくる。特に最近はこの賃貸住居が好きで、定
時に帰ってくる。なぜ、別れないのだろうか、別れた方
がずっといい日々をすごせるはずだ。しかし、と言つ
てここで立ち止まる。

「セックスがいいわけでもないのに・・・」と独り言
を言いながら、夫の部屋に入った。部屋の半分を占め
るほどセミダブルベッドが目につく。西側のカーテン
も、彼の特注で星座の中に天使が浮いている。きれい
な天使が顔半分出して空に舞う、宮尾登美子の「序の
舞」を思い出す。夫は部屋の装飾品で一番凝るのは、
カーテンの模様である、今下がつているのは天使の星
座で、色は薄紫。またこのベッドを囲むカーテンを折々
に変える趣味にぞつとした。夫はこの部屋で、ベッド
を一番高い買い物にした。その訳があるのだろうか、
そこで行うセックスに凝っているのだろうか、今まで
それほど気にもしていなかった、謎が解けたような気
がする。彼はベッド愛好家で、自分がそこで眠るベッ
ドは、彼の安住の場所なのだ。だからこの部屋には誰
も入れない。誰にも侵されずに気持ちを開放する、マ
スターベーションの空間であるのだ。そこへ連れ込む
のは今のところ、妻だけで、暴力を振るえる奈美だけ
なのだ。奈美が嫌っている彼の暴力は、彼にとつてた

った一人の配下というメツセージなのである。

奈美との日常のセンチメンスから見たら考えられないことだ。妻を土下座させるほど、痛めつける言葉、「何度言ったら分かるのだ」・「うるせいな」・「邪魔なんだ」・「うすのろ」・「ぶっ飛ばすぞ」・「出ていけ」と言つたろ」などなど言う言葉から想像つかない、昼間の言葉から、同じ人間のやつている、延長線の行為とは、思えない愛撫。若い時には、この変化についていけなかったが、最近では、夫の代償行為かもしれないと、鼻白るむことはあるが、これで、夫婦が別れなくて済むと思つているのであれば、この擬態に慣れようと、我慢してついでゆく。それとも、郁夫から見れば、日常の暴言と同じ線上の行為なのかもしれない。この行為も妻に求める高まりも、夫の自己投資なのかもしれない、と十年経つて分かるようになってきた。妻にエクスタシー感じさせることによって自分も高まる、相手が高まらなければ、自分は高まらないという相互作用、正比例の状態になるのかもしれない。だから奈美は高まったふりをする、クリトリスを中心に高まるコツを演技する。いやいつの間にか演技ではなくエクスタシーの虜になって早めに夫を籠絡させる。

「あれ」と思う間もなく、夫はバスルームに消えた。

シャワーを浴びている間に、寝乱れた肌掛けを直し、枕を捜し、乱れ切った結果を見せないように整えて、しゃつきり片づけた。余韻を共有しないという、彼から学んだ他人のようなよそよそしさは、何だろうといつも思うが、決して甘えない。無意識に夫と余韻を味わおうと思つて、待つてでもいれば、途端に二階から突き落とされるように、無視される。セックスが終われば妻は用なしになってしまう、余韻など彼には邪魔なのだ。本当に子どもが欲しいなら、普通の性交をする必要がある。そして肌を合わせたまま、寝乱れたまま朝まで寝ることだろうと思ふのだが、でもそんなことは許されるはずがない、我慢に尽きる。受胎しないのは妻が悪いのであつて、自分は十分尽くしていると思つているに違いない。寝る時ぐらいつくり寝たいし、自分のいびきに没頭したい。

「いびきをかくから、僕は妻のために寝室は別にしているんだ」と平気で言う。いびきは確かにうるさいが、セックスの後は許された関係で、ゆつくり眠りたいと、いつも思うことをまた思つた。でも、郁夫は、シャットアウトだ。その点、ここの賃貸住宅は防音装置も良く、セックスで、声を挙げてても安心だ。防音装置は飼つている動物にあるのではなくて、自分たちにあると

いう事を引越してきて分かった。アパートの時には、ベッドの軋みでさえ、遠慮した。ここでは、大声を上げなければ、隣の家の人へも届かない。家は安眠の条件が整っていることが最優先される。

彼が部屋に戻る前に、自分の部屋に帰る、彼も奈美がいらない方が喜ぶしすぐに、いびきをかいて眠るだろう。夫はセックスを睡眠薬の代わりにしていることも奈美は知っている。

(4)

自分の部屋に戻っていつも思うことだが、夫婦の謎に突き当たる。夜半、あんなに暴言を吐く夫が、夜のセックスでは、なぜエクスタシーを味わうことができるのだろうか。「夜は別物」という隠微な諺を聞くことがある。例えば、夫婦喧嘩ばかりしている夫婦でも次々と子供が生まれる、それを言っているのだろう。暴力を振るわれる奈美でさえ、この格言を信じている。しかし、少し違うことは奈美夫婦には、子どもができない、いや一回は出来たのだが、不幸にして流産してしまつた。

でも、今晚のように、セクシヤリティーを語れるような雰囲気であつても、日中の夫の言動は信じていな

い。寝室に入る前の郁夫の暴言を思い出す、体の置き場がないほど、脱力感に襲われているというのに、誘われればそれを拒否する気持ちにはなれない。

奈美は、ゆっくり眠ろうと目をつぶつた。その時、モモンガが、今まで宙ぶりのハンモックの中で寝ていた彼が、目ざとく、奈美が横になった途端に、傍らに降りてきた。いつものようにシングルベッドの脇に来てうずくまる、彼は、お得意の泣き落としで、シューシューと甘える。大きな眼だけ光らせ、奈美に催促する、早くだっこをしろという合図だ。

「なんでしよう、もう寛太は、独りで寝なさい、私は、眠い」

寛太は、無視されると悲しそうに大きな眼を閉じる。チャージングな大目をとじられたら、奈美はどうしようもない。きつとこれから、なんかいじわるされるかもしれない。寛太は、邪険なことをする、たとえば、スリッパを屑籠にいれてしまふとかハンカチを破つてしまふとか、結局、奈美は、寛太を抱いて眠ることにする。

昨晚、余分なエネルギー使ったせいか、今朝は少し寝坊した、朝の気温も十七度という温かさであれば気

持ちよく眠れる。急いでキッチンに立った。郁夫は、既に身支度して、ダイニングの椅子に掛けている。この姿勢は、食事を食べる合図なのだ、奈美はとり急ぎ、コーヒーを手濾して、夫の前に出す。少しせつかちだったのか、熱かったようだ。

「なんだこれは」と、コーヒー茶わんを元に戻す。その拍子にテーブルにコーヒーがこぼれた。この嫌がらせが奈美には一番苦手だ。テーブルクロスまで、汚れる。彼女はきれいな好きだから、何事でも拭くだけでは、気持が収まらない。でもここは、朝の一時、タオルでふき取り、夫に新しいコーヒーを入れ直す。食い下がりたいほどの厳しい扱いに、怒りを覚える。「あんたがこぼしたのだから、自分で始末しなさいよ、もうコーヒーは入れない」と大きな声で言いたい。まして昨夜愛しんだほとぼりの冷めない体でキッチンに立ったのに、と言葉が胸元に燻っていたが、口を噤んで、言葉にしない。

「なぜ、反撃しないのよと、」親友は言うが、彼女の助言が正しいとは思っているが、朝の一時機嫌よく、夫を職場に出さなければ、その後、どのぐらい「余計なことをするからだ」とか「遅くまで寝ているからあわてるのだ」と言い返される。そっちの方が面倒だ。夫

はどんなに高みから暴言を吐いても、自分は悪いとは決して思わない、奈美が謝るまで怒鳴りまくる。最後は出ていけ、お前の顔を見るのも嫌だ、といきり立って、そのあげく、椅子を蹴飛ばして出掛けるのが落ちだ。逆らわない、黙ってコーヒーを入れ直した方が早い、一時も早く、夫を家から出して、自分もたくして職場、保健所に行かなければならない。最低八時半には出勤簿に印鑑を押さなければならぬ、また怪我をして居る間もない、今日の予定がぎつしり詰まっている。午前中、遅刻することなど、決してできない。

このような悪循環で、夫の暴君ぶりを見逃してきた結果、十二年選手でありながら、夫に反撃できないでいる。奈美の言い訳はいつも同じ、暴力が怖い、いや怪我をしては職場に行けない。仕事で穴をあけることはできないのだ。もつと深層には、子どもができないというコンプレックスがある。奈美は、いつも自分のせいではないと思っではいるが、結果論では自分のせいにしていく。生理も規則的にあるし基礎体温でも排卵の兆候が出ている。もし欠陥があるとすれば、それは二人の相性の悪さなのかもしれない。奈美の中から、夫を拒否するホルモンが出るのかもしれない、セック

スでの高ぶりは十分に味わっているが、そこから醸し出す大らかさがない。愛されているという温かみがないから、卵子が精子を拒否するのも知れない。その気振りを感じて、郁夫でさえ、夕べのように気を使ってくれているが、それは横になっているときのこと、二人が立ち上がった時から奈美の中では緊張感が走り、夫に心を許す気持ちになれない。せめて暴言だけならいいが傲慢な彼は、妻に伝わらないと思うのか拳を突き出すか、足で蹴ってくる。この仕打ちを受けたときの奈美の気持ちは、哀しみで、震える。この繰り返しを十日に一回かそれとも半月に一度繰り返し返されてしまうと、気持ちが悪く縮んでしまう。そしてそこには諦め感どころか、いつか夫は罰を受けるだろうという思いの反感が生じる。「神様」という言葉を、奈美は平易に使うが、自分で仕返しができないので、ただ、公平な神様がいて、奈美に味方してくれているような気がするのだ。

彼の暴力は、妻にだけ向かっていることに、結婚当初から気づいていた。彼の付き合いは多い方ではないが、それでも病院では、班長がいて、パートナーには薬剤師が三名、その助手、そして外部の営業マンたち

とも仲良く付き合い合っている。担当の女性医師がいて夫には厳しいことを言うらしいが彼は、その厳しい付き合いにも慣れていると聞く。

武井郁夫と結婚するきっかけは、保健所の、乳幼児健康相談の時に出会っている。その当時、薬剤師は、「子供のくすり相談」のコーナーを担当していた。子どもに自宅で風邪薬やビタミン剤、そして、栄養剤などを飲ませている母親が多かった。テレビの影響で、母親は買い薬を安易に飲ませる習慣もあった。薬剤師の専門知識は家庭の置き薬の熱さましにもアドバイスが必要であった。

そのチームで働いていた奈美を武井は見初めた。彼女が母親の歯科相談をしている姿に親近感を持ったという、家が歯科医院なので、特に歯科衛生士に興味を持ったのかもしれない、という出会いから発展して、結婚に至っている。

武井は、三代続いた歯科医の次男。美奈は、仙台の中学校の教師を親に持つ、共稼ぎの両親で、親からの要求、先生になれという威圧を跳ねのけて、神奈川県歯科衛生士の短大に入った、意識の低い選択であった。出来たら何でもいいから、親の目の届かない土地に逃げたかった。そこで県が募集している保健所の歯

科衛生士になった。歯科医院の息子が、歯科衛生士に近づいたのは、奈美の人柄、いややさしさに惹かれたとも言える。いや邪推すれば、「御しやすい女」というイメージを持ったのかもしれない、一般医師と看護師との関係に似ている、歯科衛生士の奈美を見て、彼女の歯科医に仕える謙虚さを見通したのであろう。

「靴下や靴磨きの準備など、大正時代の錯覚よ、夫を自立させられないのは、貴方が悪い」とまで、友人たちに言われている。でも、いつも思ってしまう。

「夫が期待する、その程度のことです。妻の役割が果たせるなら、大したことではない」

と、奈美は思っていた。そんな服従心がやがて、大きな結果を生むとは思っていなかった。

結婚生活を始めたころから、奈美は、リーダーシップが取れなかった。当然である、夫になった郁夫は、歯科医の息子、本来なら、深窓の女性を妻にするか、それとも、同業者の薬剤師だろうと思っていたのでは、ないか、それなのに、彼は、地方から出てきた、それも教育者の家庭の娘、そこに目を当てた。家柄もいいし、本人は地方公務員だ。ただの歯科衛生士ではないということ、彼の妻選びは社会的に成功している、

では家の中ではどうかというと、夫の言うとおりになる、従属関係の間柄である、何を言っても、高慢に出ても、彼女は従ってくるはずだと踏まれてしまった。だからかなり無理難題してもついてくるし、暴言を吐いても許されると、見て取ってしまったのだ。そこに郁夫は胡坐をかいてしまった。無理難題を言っても出て行かない、妻の生き方を軽く見てしまった。

故郷の遠い人は、忍耐力がある、おいそれと実家へ逃げるわけにはいかないから、里帰りすれば、三日はかかる、そんなに仕事に穴をあけるわけにはいかない、というわけで、郁夫は妻にわがままを通すDV夫になつてしまった。もともと内在してはいたのだろうが、周りが堅い時には、その反社会的な行為を、やすやすと出すことはできないで我慢していた、しかし奈美の性格では、思った通りに動いても大丈夫、風穴を開けられる心配はないと踏んだのだ。

(5)

その朝、彼は、風呂がぬるかかったと言つて、奈美にやつ当たりする。初夏のこの時期、湯の温度を低くしたのは夫であるが、自分が設定したのを忘れていた。確かに今朝は、肌寒い。でも風呂など一時で湯の温度

はすぐ上がるようにできる。

「こんなぬるい風呂入れるか、いつも言っているだろう、熱いものは熱くしなければさっぱりしないのだと」「ごめんさい、ちよつと気づかなかつたものですから、冷めてしまったの」

「また、いいわけかよ、子どもがいるわけでもないんだろう。俺の世話ぐらいちゃんとしろよ」

理屈に合わないことを大声で言つて、彼は、玄関に行つてしまった。風呂を覗くと、シャワーは出しっぱなし、風呂の蓋も、取つたままで、さんざんたるものである。この家は一軒家だから、風呂場の音の響きも心配ないが、アパートの時など全世帯に聞こえてしまうほど風呂場の器具の音は響くから要注意だつた。

でも彼の次の行程は心配だ。まだ靴を出していなかった。きつとこの調子では、靴も磨いてないと怒るだろう。

思つたとおりだ、玄関の外に黒い靴が捨ててある。捨てる場面を見た人はないだろうが、いつも靴を投げる人としてうわさになつてゐる。

奈美は、不愉快さで、背中にびっしり汗をかいた、未だ五月、それほど暖かいわけではないのに。いい加減にしろと言いたい、こちらこそ、怒鳴りたいが、そ

れどころではない七時半のバスに乗らなければ、職場に間に合わない。まだモモンガの食事を出していない、洗濯も干していない。

キッチンにいたモモンガが静かだ。テーブルの下を覗くと、夫が食わずに流しに捨てて行つたスープをなめてゐる。モモンガは家族の食事と同じものが食べられる。ましてスープは好きだ。彼専用のカップに、餌を入れて、その上に、スープを掛けてしまふ。

奈美がテーブルを片づけている間に、彼は木の裏の入つたカップに頭を突つ込んで、最後の餌を食べている。この格好が彼のお得意技。わき目もふらずにという感じがする。

「寛太、お留守番よ」

寛太は、その言葉を聞き遂げたのか、カチ、カチ、カチと鳴く。いやだという合図だ。彼は、不機嫌さをむき出しにして、窓枠迄飛んで行つてしまった。「そんなこと言つても、今朝は時間がないの。私も七時半のバスに乗る。だから、一緒にいられない。この部屋で自由に遊んでいいからね、置いていくよ」と、郁夫に負けず劣らず、大きな声で寛太を叱つて、自分の身支度に入つた。職場には八時半に着けばいいのだが、何ぶんバスの本数が少ない。

モモンガは一人の留守番にも慣れてゐる。尿、便をするところは、網目の籠の中におむつを敷いておくところにする。彼の尿も臭わない。そしてユリカゴの中で、一日中でも眠っている。夜行性だから、日中はほとんど動かない。しかし昨晩のように、遊んであげないと、機嫌が悪い。だから今日は、部屋の中にマリを、三個用意しておく、そこでぐるぐる回って遊ぶ。もし夫が先に帰ってくると困る、夫は本心では寛太が気に入らない、妻へのやきもちかもしれないが邪険にする。嫉妬しているのかもしれない、妻を独占したいのに、モモンガがいると気が散るといふ。モモンガの方もその雰囲気を知り、急いで奈美の部屋に入ってしまう。ほとんど奈美の部屋の戸袋の所に張ったハンモックの中で寝ている。上窓を開けておくと風が入ってきて、寛太にはいい環境だ。

夜、郁夫から、遅くなるという電話があつたので、奈美は早めに風呂に入つて、鏡の前に立つた時、背中、肩甲骨の角に内出血の跡があるのに気付いた。五センチはある、充血している、三日前、殴られた時の内出血だ。たいしたことはないと思つたが、触れれば痛い。さてどうしようか。医者に行くほどではないが手当は

した方がいい、風呂から上がつて化膿止めの抗生物質を塗つた。塗りながらいつも押し寄せてくるのは、みじめさである。体を傷つけられた時に味わう、底知れぬ悔しさである。親につねられたことも叩かれたこともない体、郁夫との結婚生活で、どのぐらい傷ついているか分からない、仙台の両親に話したら、即刻離婚しなさい、警察に訴えるというだろう。娘の体が傷ついているなんて知つたら、容赦しないだろう。なぜ踏みとどまっているんだと、こっぴどく叱られるに決まつている。本当に、なぜ郁夫から離れないのだろう。幸いに子どももない、未練があるわけがないといふと叱られそうだ。なぜ、逃げないのだろう。このいじけた気持ち、誰に対してもない、悔しさが募る。なぜ逃げてしまうわなかつたのか、というみじめさに浸っている。体のどこかの傷は、決して体だけでない、心も蝕む。なぜやられつばなしなんだろう、むしゃぶりついても夫を倒せるぐらいの体力はあつたはずなのに、いつも逃げてゐる。他人は夫が好きだから逃げてゐるというが、昔は別だが今は本心から嫌いだ。なのに、いつもいつも逃げてゐる、逃げるような性格ではなかつたのに、逃げてしまう、この根性のなさは何時からなのだろう、逃げることで起こる暴力、怪我が怖い

だ、怪我して医者に行くこと、日常性が損なわれることが怖いのだ。

なぜ、怪我が怖いのだ、怪我をすれば、明日の仕事を休まなければならない、一日休暇を取ることが怖いのだ、休みたくない、毎日続けて働き、継続を喜びとしていているから彼はエスカレーターしてくる、やり込めてこない相手なら、何をしてもいいと体が覚えてしまったのだ。だから、夫は無駄図に手を挙げる、そして思う存分殴りかかってくる。奈美は、本質論から逃げている。一人では無理なら、第三者を立てて現状を訴え、話し合わなければいけないのに逃げています。

(6)

奈美の新しい生活は、モモンガとうまくマッチしていきけるが、最近、ひどく疲れることに気づいた。引越して疲れたのだろうと、我慢をしてやりくりしていた。しかし疲労感を取れない。

医者にみてもらった方がいいかもと、故郷の母からの助言もあって、総合病院に受診した。

右の乳房に三センチの腫瘍が見つかった。運が悪いことに左の乳腺もはれている、転移があるかもしれないと左まで生体検査を受けた。

一週間後に夫と一緒に来てくださいと言われた。奈美は急に心配になって、実家の母親にまで手を回していた。

「郁夫さんが行ってくれるのが一番、よく相談しなさい」と勧められた。どっちにしても、このしこりは取らなければならないのだ。これが悪性であれば、今週中にも入院する予定を立てた。ただ心配なのは転移していないかどうかだ。左の乳房と腕下リンパ節を丁寧に見てもらった。

白衣を短めに着た、須藤医師は、奈美が夫と一緒に入っていったので、瞬間すぐにフィルムの方に目を移し、「悪性ですね」と簡単に言った。

「でも取ってしまえば、転移は大丈夫ですから、すっきりした方がいい」と医師は即座に答えた。

「どうしてできたのでしょうか」と夫は、またピンと外れな質問をした。

「原因が分かれば、予防できるのですが、誰にも分らないので」

夫は、薬剤師らしく重ねて訊く。

「先生、乳がんは、外人に多いということも聞いていますが、肉食が多いとできやすい。妻は牛乳や肉が好きで三食食べます」夫は、どこで仕入れてきたのか食

べ物のことまで、食い下がって聞く。

「けっしてそんな単純なものでは、ありません、確かに野菜よりも乳製品を食べる人に多い、かもしれませんがね」

「先生、子どもがいらない人に多いとか、私も医療関係で働く薬剤師なんです」

「うーん、それもはっきりしません、確か、統計的には子どもがいらない人の方が多いかもしれません。また遺伝性もあると言われますがこの方もはっきりしませんね」

「妻は、保健所で働いているものですからレントゲンを浴びるとか、そんな心配をしていましたのです」

「まあ、でも医療従事者に多いということはありませんから、ご心配しないで。遺伝性もありませんし」

「そうですね、安心しました。ですがもう一つ、動物を飼っています、これはどうですか」

「何を飼っているのですか、猫」

「そんならいいのですがうちはモモンガが好きで、部屋で飼っています」

「モモンガですか。それはまた珍しい、どうしてまた」

「妻は、仙台の実家から持ってきています。それも一緒に寝ている」

「そんなことありません、モモンガは、一緒に寝ません、ハンモックで寝ます」奈美は慌てて訂正した。郁夫はなんでもかんでもオーバーな方をする。

「まあ、まあ、いづれも原因ではありません、確かに、愛情を寄せたいというのが人間の本心ですから、いいじゃないですか」

首藤外科医は、つじつまの合わないことを言って早く切り返したかったようだが、夫は十分説明を求めたかったようだ。医師の前では、妻に関心があるようにすっかり良い夫の役割をしている。

「乳がんの、中期ですね」と否応なく診断された。決して誰を恨むわけでもないが、気付くのが遅かった自分を責めたい。昨年の健康診断では「異常なし」で結果を聞いた。その時右の乳房に、かすかな張りを感じていた。今までも乳房自己触診、二年に一回のマンモグラフィもやっていたから、本当は初期だろう、と自分なりに、結論出していたが中期とは恐れ入った。

奈美は、眠れないほど気持ち揺らいでいるので、手術は母に立ち合ってもらうことにした。

母は、手術の前日、仙台からきてくれた。母が立ちあってくれば安心だし、納得できる。夫ではだめだ、彼は、切開した乳房を見ても、きつと自分なりに解釈

してしまふだろう、気の小さい郁夫は、怖いと思う事は、そのままを伝えることが出来ないのだ。主治医とコミュニケーションが取れると思えない。田舎の母に委ねた方が正確に見て教えてくれるに違いない。

「右の乳房と脇の下のリンパ節も取るから、全身麻酔でやる」と当然のごとく須藤医師は、同情もなく言った。奈美もその方がいいと思っている、この歳で、同情されてもしょうがない。乳房など、もういらないうらう、この方が夫婦関係もさっぱりしていい、なんか半分女性扱いされるよりは、すべて無視された方がいい、どうせ、夫も男性のパートナーと思わずに、家の主として付き合ってきている。

「私は、もう女ではない、同居人だと思われた方がさっぱりする。どうせ、別室に寝ているのだから、その方が、さっぱりだ。中性として見てもらいたい」

どうせ、この方がさっぱりよ、もう妻と思われたい、ほうが本望だ。同居人と思われた方が、これで、妻として扱われなければ、暴言も暴力も切り捨てて付き合える、と心に決めて、手術室に、向かった。

手術時間は二時間だというから、奈美は三時には戻れる。

郁夫は仕事には几帳面で、病院の薬剤師仲間迷惑を掛けたくないという午後は戻っていった。病院のベンチに母と一緒に座っていることの厄介さが応えるらしい。私生活でも、独りで何でもやりたがる人だけに妻の手術も、医師に任せておけばいいと踏んだのであろう。

「お母さん、後お願いします。もしがんの肉片を見せられるようでしたら、悪いけど、この写真機で写真撮っておいてください」

と言つて、奈美のカメラを置いて行つた。どうせ、自分で撮るつもりはなかったろうから、母親に預けて帰ってしまった方がいい。気の小さな郁夫は、妻の肉片など、写真をとるつもりなどなかったようだ。

母の共子は「妻の手術ぐらい付き合いなさいよ」と言いたかったが、娘から、自分勝手な人だということを知っていたので、まあ、いいやと思つて、独りで、手術が終わるのを待つていた。

「どうせ、私のいうことなど聞く人ではないだろう、奈美が独りで闘っているのに、なんと白状な奴」と口の中で独り言を言っていた、母親は元教師だから何事でも言葉にする。

それよりも、奈美は、右の乳房だけでなく、左側も試験的にと切除するかもしれないと言つていたことが、

急に心配になってきた。

母親の共子は、独りになった途端に心配が倍増してきた。座ってられないので、窓際に立った。窓の下は小高い山になって、ブナが茂っている。灰色の縞模様地の衣が、木々の尊厳に、それでいて木の茂った空は隙間なく小判型の葉に覆われている。入院患者の散歩道もあるのか、人の影が通り過ぎた。ブナの木々を見とれながら母は、奈美のことを思っていた。彼女が子供を産めないで、乳房を全摘される、この惨事に痛みを覚えた。

「仙台と同じブナの林がある、良かった、手術終えたら、奈美を一回家に連れて帰ろう。昨晩も夫婦の会話もなく、私に遠慮したのかもしれないが、なんかひどく寂しげだった」と独り言を言った。

「乳がんは、ストレスのある生活が危険だという、郁夫さんとうまくいっていないのかもしれない。仙台で可愛がっていた寛太がまだいるのでびっくりした。いつかは山に戻さなければいけないと思っていたが、出来たら、ここで家に連れて帰ろうかな、でも連れて帰ったら、奈美は寂しがるだろう」

取りとめもなく、奈美の手術のことから、モモンガのことまで思いをはせていた。手術は、旨く行っても

当分は主婦の仕事は出来ないだろう、食事は、テークアウトの店が駅前にあるから心配ないと、言っていたが、そればかり頼っているものだろうか、出来たら、私が四、五日面倒を見ていきたいのだが、郁夫さんは何というだろう、今晚にでも相談してみよう。なんか、奈美の活気のなさが、気になる。

「夫婦仲がうまくいっていないのかもしれない、奈美は、じつと耐える方だし、郁夫さんとかかわりで委縮して生きているに違いない。また、私が共稼ぎで、しつかり家事を教えていないから、ドジばかりするのかもしれない、薬剤師など結婚させなければよかった、もつと平凡な公務員で良かったのに。薬剤師は、人間相手ではなく薬物、医療相手だからか、気難しい、奈美はそんな器じゃない、覇気がない。人と闘う言葉をしらない、いつか「馬鹿ね」と言ったのを聞いたことがある。その相手は父親のことだった、父親に「馬鹿ね」という言葉はない、反抗期の娘なら「自分勝手なんだから」というレベルであろう、彼女が喧嘩する相手は、母親の私だけである、それだって、お母さんは、「一人よがりだ」と言ってきた、普通ならば「なんでも押し付けて、嫌いと言うだろうが、誰に似たのだから、だからモモンガのような優しい動物が、傍にいな

ければ彼女は吐け口がない。このことを知っているのは、私だけかもしれない」

遠い所へ手放した自分が悪いのだ、と自嘲している
と、「武井さん、手術が終わりました」と呼ばれた。

奈美は一週間ぶりに、自宅に戻ってきた。まだ完治とは言えない、ケロイド体質なので、大きな傷口は完全に塞がっていないので包帯を巻き、その上にぶかぶかのシャツを着ている。物々しい格好だがどうしようもない。気を付けることは、傷口に負担を掛けないことと、入浴はシャワーで済ますことと言われた。もちろん上腕筋に力を入れられないので、料理、掃除が大変だ。

奈美は、十日間たっているのに、体に力が入らない。

これは女性として大切な乳房を失くしてしまったことにあるのか、久しぶりに母に来てもらって、モモンガを交えて三人で寝た経験が、奈美を急に幼児返りさせたのか、それとも、本当に体力を消耗してしまったのか、どちらなのだろう。

(7)

術後十二日の朝、奈美は、母を小田急線の駅まで見

送った。母とホームに立っていると、このまま快速で、新宿まで行ってしまいたいような、ブレを感じるの、母の引力が強いからなのだろうか、今まで、元気な時には感じたこともない揺れだ。

「置いていかないで」と言いそうな口元、その口を押えて、別の言葉舌に載せていた。

「お母さん、メスのモモンガを探して送ってよ。寛太だけじゃ、寂しい。駄目なの。モモンガが番になると、飼い主を外敵から守るんですって。私が夫に暴力をふるわれそうになったとき、モモンガが飛んできて夫の周りを飛び、また一度は夫の腕にからまるのです。すると夫は暴力の手を緩めざるを得ない、と。これだと思いました」

「モモンガで、慰められるのなら、お安い御用、郁夫さんに嫉妬されないようにね」

「大丈夫、私の部屋に入ってこないから、私が彼の部屋には入るけど、好みが違う」

「どう、違うの、夜は入っていくのよ、無視しちゃだめだからね」

「無視するほど強くない、でもこれからは、夫は私を呼ばないのじゃないかな。昨日、私の手術跡を見て、いやーな顔したよ、本当は同情するものでしょうよね」

「そんなことない、奈美は、奈美だよ、お前の体つきが好みで彼は結婚したと言っていたから、大丈夫、一日も早く人工乳房を作りなさい。そして、元気になつて仕事を頑張りなさい」

「私の、プロポーションがいいって、郁夫さんが言ってたっていうの、ほんとう」

「おかあさんに言ったのは、首の線から、肩、いかり肩でない線がいい、と言ったよ、男はあんまり口には出さないが、首から胸元の線、そして肩への流れ、そういうところを彼は見ていたみたいよ、奈美は、姿で気に入られたのだから、もっと自信を持ちなさい、おっぱいの一つや二つ、気にしなさんな、」

電車を待っているホームで、共子と立ち話をする。

母親は、いつも見方なんだと、うれしかった、乳房を取ってしまった妻を夫はいたわるだろうか、すつかり自信を失った奈美を、母親が元気づけてくれた。小学校の先生は、娘でさえ、上手におだてて、元気をづけてくれる。並んで立っていると姉妹のようだ。母は、奈美と違って肩幅が広く怒り肩だ。昔から、娘に自信つけるのがうまかった。この母がいるから、故郷を離れても公務員、歯科衛生士としてやってこられたのだ。そんな母が容姿のことで、乳房を失った娘にヨイショ

するとは思わなかった。奈美の自信を失っている姿が、つらかったのだろう。昨晚、布団並べて寝ているときにも、つらいことがあったら仙台に帰ってきなさい、と何気なく言ってくれた。

「うん、でも仕事好きだからやめない、モモンガと一緒に働く」と返事をした。誰のためでもない、仕事をしている自分が好きなのだ、と思っている。

「あ、快速が来た、一時間で新宿だから、東京行は、降りたところから階段を上がって、そのまんま東京方面、五番線に行く」

母は、ハイハイと調子合せて、電車の中に納まってしまった。座席に座った体を窓際に向けて手をちよつと振った。奈美はふと思った、今回の入院したことで、一番良かったのは、母に来てもらえたことだ。母にたつぷり甘えることができた。

母の世話になったことなど今まで一度もなかったやうな気がする。この前のアパートでも、そして郁夫の実家の二階に住んでいた時も母は泊まり込みで世話してくれた。しかし、母は駅前ホテルに泊まって、次の日の夕方には帰ってしまったので、今回のように十日間も泊まって看病してくれたことは、どんなにうれしいか分からない。もちろん共子には、仕事があった

こともあるが、娘の傍に泊まることに気兼ねしていた。今回は、一戸住宅の和室でゆっくり寝られたことが大きかった。郁夫に心配しないで、足伸ばして「寝られた」、とよるこんでいた。

娘孝行してもらったが、母親孝行できたのか分らない。母親の世話になるのもいいものだ、痛いところに手が届く。奈美が髪を洗うのが好きだということも知っていて、毎晩洗ってくれた。そのおかげで深い眠りを得られた。

(8)

奈美の術後の生活は順調に過ぎて、一か月で復職する。左の乳房には転移していなかったこともラッキーだった。人工の乳房カップは、最善の物を造ってもらって装着したので、外観は、健康な時と変わらず、白衣のユニホーム、トレーナー姿は体にフィットした。

よそから見ては、変わりないつもりだが、しかし、診察台に対象者を載せるときには、気を使った。もちろん厚地のエプロンで体をカバーするが、なんかの拍子に胸を押されるときには怖かった。

でも、その中で一番ダメージを受けたのは、セックスであった。夫は、五十一歳、奈美は四十六歳、二人

とも若い。乳房摘出術した時には、乳房に触れなければいいと、教わったが、しかしそれは、夫側の問題である。奈美はもう卒業したいと思っていたし、暗にそのことを夫に言ってきたつもりだが、夫の言い分では、セックスに何ら影響ないはずだという。それは身体の問題ではなく、心の問題だと夫は気にしない。でも女性のエクスタシーは、乳房にもある、乳房の愛撫が入り口になっていて、そこから広がる。

奈美にとってセクシャリティーにおける、乳房の役割は大きい。郁夫は気づかないだろうが、その前に、もっと大事なことがある。乳房を失った妻の気持ち、喪失感が大きいので、夫の労わりを待っている。しかし、郁夫は、職業病もあるが、自分より低い位置にいる人への同情心が薄い。

もともと夫は奈美を労わる、ということは、根本的になかった、妻を大事にするような人が、妻に暴力は働くわけがない、いや働けない。妻に暴言を吐いて嫌悪感を抱かせて、はい、それまでと言って妻の横に寝て抱くというマゾヒズム。この筋道は夫の合理性で、女は体を横になる前から、心地よい環境に置いていなければ、悔しい気持ちのまま、抱かれているときは、エクスタシーは来ない。

もし今晚抱こうとするなら、家事の分担から、病後の奈美の身の回り、テレビ番組迄気を使ってやさしさと包んだ会話、または気遣いが必要になる。それなのに、術前と変わらない、いや入院する前以上に威張り、仕事から帰ってきて、不愛想にそこらに置いてある洋服を蹴飛ばし、さらに、靴下まで放つて置く。奈美は、うんざりして、夫から距離を置こうとするが、野心があるのをごまかそうとするのか、「風呂が沸いてない」「窓が開きっぱなし」などと、奈美に寄ってきて、いたわりのない言葉を次々と吐く。「自分でやっておいてよ」とでも言い返せば、「お前の仕事だろ」と、手術前とちつとも変っていない。妻は自分の持ち物のようにぞんざいな口を利く、そして意に添わなければ、「そこだけ、邪魔なんだ」といつもの口調で、とげのある言葉が飛んでくる。そんな言葉を吐くときの、夫の形相は、傲慢で冷たい眼をする、眼の強張りを、どこで身に付けたのだろうか、決して一朝一夕にはできる技ではない。この芸当は、辿れば、きつと夫の父親も、妻を怒鳴るときに眼に張り付けていたのかもしれない。それが、いつの間にか、息子も父親を越える歳になって繰り返す。

梅雨開けた週末、郁夫は同業者と、ドライブに行くことになって、家まで夫を迎えに来た。

奈美は早めに支度して門の外で待っていた。迎えの人は市立の薬剤師会センターの理事と会長、事務長が郁夫が出てくるのを待っていた。二十分ばかり経つたろうか、夫は靴をつっかけながら、急いで奈美たちのところにやってきた。

しかし、郁夫はなにを勘違いしたのか、「いちいち余計なことを言いやがって」と大声を上げた。意味不明な言葉、なぜ、ここで夫が大声を上げるのか分からず、黙っていると夫は拳を上げてきた。奈美が一瞬逃げようと体の向きを変えたが、夫の拳は、奈美の脇腹に当たった。

「痛い、何ですか、何怒っているの」と奈美は逃げる姿勢になった。それが災いしたのか、また、拳が肩に落ちた。

「武井さん、夫婦喧嘩なら、後でしなさい。みつともない」と会長は、夫の腕をつかんだ。その途端、夫は、熱が冷めたように静かになって、

「いや、妻が誰にでも俺の悪口を言うから、またかと思つて、大変失礼しました」

「武井さん、妻に暴力をしちや、ダメだよ、もしこれ

が続くようなら、薬剤師会でも問題になるし、きつと今の職にも影響するだろう、社会的に医療従事者は、DVは禁止で、罪が重いからな」

「自分でも、気にしていた、どうしてもやめられない、治療します」

「そうしてくれ、それを期待して理事のポスト据え置くことにするから」

会長は強い口調で言い切った。

車が去った後、奈美の胸にこみあげた口惜しさよりも、夫はなぜ、人前で、奈美を怒ったかである。今までも怒って拳を上げることはあったが、それはいつも家の中だけである。それがこの瞬間外で怒ったということは今までとは大きな違いである。夫は、きつと、妻が夫の準備に手間だったことを嘆いて、会長に告げ口したと思ひ込んだようだ。その怒りが拳であった。確かに、夫の迎えに、妻が先に出て、それも会長と仲良さそうに話している姿は、誤解を招くものであった、それをセーブできずに夫は、向きだして怒ってきた。夫が逆上するほど、奈美が会長にくつついていたということなのだろう。

彼のDVが公になってしまった、しかし奈美は、このことを後悔していない、DVは密かに行われるより

も、人前にさらけ出して、そこで、本人が自覚することの方が立ち直れると聞く。

(9)

奈美は、明日から出勤するという午後、大家の未知子宅へ挨拶に伺った。

未知子は、花壇の手入れをしていた。ポーチ型の花壇に夏の花が、咲き始めている。ダリア、ナデシコ、日日草の中にシヤスタデージーが真っ盛りだ。どこにもある花ばかりだが、白と黄色のパンジーが白い花びらを太陽に広げている。

「春が終わるのにきれいな花壇ですね、手入れも良くて」

「いや、あるがままです、でも花が良く咲きますから、訪れる人には喜ばれます」

「明日から保健所に出勤します、大変お世話様になりました。丁度一か月休みました」

「たいへんでしたね、お見舞いも伺いませんで」

「ご挨拶がてら、肥やしを少し分けてくださいませんか。苗が伸びなくなつて花壇の土が少ないのか、花がやせてしまいました」

「時々肥料を足さないとね。バケツ一杯混合肥料を混

ぜた土があります、持っていつてください」

「いいですか、助かります」

「肥料がなくなつたと思つていました、入居した時以来ですから、二年経ちます。大丈夫です、バケツ私が、持つて行ってあげます、そうだ、それで花はデージーとマリーゴールド、ラナンキュラスを二株ずつこの籠に入れます。今日、やつてしまひましょうよ、善は急げだ」

「体の調子は良くなつていますが、未だ、重いものは持てません。すみません」

「私は庭づくりでは年季が入っています、元は百姓の娘ですから、庭仕事全部一人でやります」

「いつもきれいな庭先で、目を楽しませてもらつています」

「あ、それから、ゴミ出しですが、大丈夫ですか、未だ一人では無理でしょう」

奈美の玄関から、約二十メートルの所、道路わきに収集場所がある。ここは未知子の所有であるので、安心して出せる。

「もし、収集の後、残っているようでしたら、私の方で片づけますから、安心していてください。出せない時には、どこかへ置いてくだされば私が責任を持ちま

す」

「ありがとうございます、いつも甘えてしまつて、夫が一週間分を一気に出したこともあるようですみません、何分にも私ができなかつたので、貯めてしまひました」

「大丈夫です、上手にまとめて出しておきますから、心配しないで。仕事は助けられませんが、ごみは私の得意技です。回収車はいつもきれいに収集していきま

す、残されたことはありません」

「ありがとうございます。ご迷惑を掛けます。元気になるにはもう少し時間がかかりますが、すみません」

「なんかありましたら、私の方へ、携帯に電話ください。特にご主人のことはお母さんから聞いています。その時も、私のところに逃げてきてください、余計な

ことです」

「恐縮です、母が話したようで、迷惑かけます」

「私は、元保健師ですので、多くの方の相談に乗つていますから、心配しないでください。いつでも。またアパートも空いていますから、どうぞ使ってください」

「もう、大丈夫だと思います。モモンガが仲立ちしてくれそうです、母が、夫にモモンガの付き合い方を教えて行つたようです」

未知子は存在感の薄かった彼女が乳房の手術で変化し、強くなったように思えた。

「大方の人は離婚してしまうようですが、よく我慢しましたね」

「何度も別れたいと思ってきました。でも別れても振り出しには戻れませんでしょうと、実家の母が言います。仕事に精を出して乱暴されないように、モモンガが夫の腕に抱きついて、私を盾にして逃げて助けてくれますし」

未知子は、武井夫婦が、入居してきたとき、夫婦との関係に、緊張感があることに気付いた。いふなれば、夫婦を何年間かやっているうちに身に付く、阿吽の呼吸みたいなものである。妻がしゃべらなくても通じるものが二人の中にはない、と知った時この夫婦にはDVがあるのではないかと感知した。だから、夫婦別室を求めていることに気づいた。この貸家は、二部屋が個室として設計されていたので、この広さなら満足する、と思ったとおり、夫婦は、ベッドを二つ持ってきた。さらに結婚歴十年以上たっているらしいのに、二人の会話に親しみがなく、未知子は気づいた。

手術後、彼女の夫とのDVのことは母親から聞いているので、これからも力を貸したいと思っている。右

の腕に力が入らないという、術後のハンディを抱えている、彼女を助けたいと思った。賃貸関係は、長い付き合いになる、今まで入居してきた人たちと同じように、相談相手になればと願っている。

病気の回復祝いに、花壇づくりを手伝えるのは貸主冥利である、花壇はきつと彼女の心の逃げ場になるだろう。奈美は乳房摘出という大きな犠牲を払って、ここで夫の暴力から逃げる手段を得るだろう、そう期待したいと思った。